

アール・ブリュット振興を通じた共生社会の模索 —中央線沿線のまちのアートプロジェクトを事例に—¹

川 村 陶 子

1. はじめに

2010年代、東京・中央線沿線の中野、立川、吉祥寺（武蔵野）で、「アール・ブリュット」をテーマとしたアートプロジェクト²が始まった。いずれも実行委員会方式で毎年1回、アール・ブリュットの美術作品展示を中心とするイベントを行い、さまざまな個性をもつ人びとがともに生きるコミュニティづくりをめざしている。

3つのまちのイベントはいずれも、2011年頃から日本国内で注目を集めている「芸術文化を通じた社会（的）包摂」³の取り組みの流れに位置づけられる。武蔵野の場合は、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催を視野に入れ、多様性を大切にする社会の実現を目的として開催されている。社会包摂型のアートイベントないしプロジェクトは各地で数多く行われているが、中央線沿線の3つのまちでは共通して「アール・ブリュット」をテーマとしているのが特徴的である。

アール・ブリュットは、後述するように、障害者アート、障害者の芸術表現、障害のある人の創作活動といった諸概念と重なる⁴。3つのまちのイベントも障害のある人たちとの共生を大きな柱としており、実行委員会では障害者福祉の関係者が中心的な役割を果たしている。他方で、アール・ブリュットは、芸術家の「たぐい稀なる魂」（シャンプノワ2019: 36）を中心に据え、アートとしての前衛性を重視する概念であり、これを社会包摂のキーワードとすることには幾重にも難しさがつきまとう。

この小論では、前半で、アール・ブリュットという冠の下で共生や包摂をめざす実践を概観し、その問題点と可能性を考察する。そのうえで後半では、3つのまちのイベントを、実行委員会形式による社会包摂型アートイベントの企画運営という観点から、大まかに試論的に比較分析する。イベントの趣旨や内容、運営方法にあらわれるまちの個性や抱える課題を明らかにするとともに、3つのまちがアール・ブリュット概念をそれぞれ独自の立ち位置で解釈しつつ共生のコミュニティづくりを模索していることを確認したい。

筆者は、縁あって武蔵野アール・ブリュット2019実行委員会に参加し、2019年7月にコラボ企画として、中野・立川・武蔵野でイベント企画運営の中心になっている方々を成蹊大学に招き、シ

ンポジウムを行う機会を得た⁵。本稿の第3節以降の内容を構成するにあたり、ここで行われた議論を全般的に参考にした。中野と立川の関係者からの聞き取り（2019年6～7月）や提供資料、武蔵野アール・ブリュット2019・2020実行委員会での筆者自身の経験も参考にした⁶。

2. アール・ブリュット振興を通じた社会包摂

アール・ブリュットは、フランス語で「生（き）の芸術」「加工されていない芸術」を指す。フランスの画家ジャン・デュビュッフェが1945年に提唱した概念である。「芸術文化の中で無傷なもの」（シャンプノワ2019: 35）だけを芸術とみなしたデュビュッフェは、精神病者の芸術作品に触発され、それを医学の分野から切り離し純粋な芸術として評価するために、「狂人の芸術だけではなく、より広い意味で通常の美術界とは無縁の人たちが作った作品」との意味でアール・ブリュットという造語を用いた（服部2003: 48）。物理的ないし内面的に社会と断絶し、事前に計画せず独学で「精神のほとばしりから作品を創作」する、そうした活動によって自身の心の均衡を保つデュビュッフェの考えるアール・ブリュットの作家とはこのような人びとのことであった（シャンプノワ2019: 第3章）。アールブリュットには、1972年に英国のロジャー・カーディナルによってアウトサイダー・アートという英訳語があてられ、日本では長らくアウトサイダー・アートという語のほうで流通していた。

このような性格をもつアール・ブリュットを振興することは、より包摂的（インクルーシヴ）な社会の実現につながるのだろうか。つながるとしたらどのような形であろうか。

文化庁と九州大学の共同研究チームが作成した『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』によると、社会包摂とは「違いのある人たちを、違いを尊重したまま受け入れる社会を目指そうという考え方」である。1990年代にヨーロッパで「社会的排除」の対概念として生まれたこの考え方は、日本では2000年に厚生労働省で取り上げられた。文化庁でも2011年の「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第3次）」で言及され、以後文化政策の重要な要素となっている。文化芸術の社会包摂機能は本来、マイノリティの人たちが表現活動を通じて自己肯定感や自己能力感を高める、多様な人たちがともに創造活動を行うことで相互の理解が深まるといった形で発揮される。ただ、日本ではしばしばマジョリティの社会へ参加する機会をマイノリティに提供するだけで満足してしまうのが現状である。多様な人たちが違いを認め合う関係を築くには、社会的に弱い立場の人たちのエンパワメントと、社会の大多数を占める人たちの意識変革との双方を目標に据えなくてはならないとされる（文化庁×九州大学共同研究チーム2019: 22-24）。

アール・ブリュットは、文化政策における障害者の社会包摂の文脈において、芸術活動を通じて障害をもつ人びとをエンパワーし、相互行為に基づく関係構築や社会変容を促す可能性があるものとして注目されている⁷。川井田祥子は、「障害者がセルフエスティームを育み、社会との関係を

再構築するための一つの手がかり」を提供した例として、たんぼぼの家（奈良市）のエイブル・アート・ムーブメント⁸、アトリエ インカーブ（大阪市）による現代アート市場進出と並び、滋賀県社会福祉事業団（現・社会福祉法人グロー）によるアール・ブリュット振興を挙げた（川井田 2013: 134）。

滋賀県社会福祉事業団（当時）は、2001年に障害者の文化活動支援を主要事業のひとつと位置づけ、04年近江八幡市に専門のボーダレス・アートギャラリー（のちにミュージアム）NO-MAを開設した。NO-MAはその後、デュビュッフェが設立したスイスのアール・ブリュット・コレクションとの連携事業を行い、08年にはローザンヌで「JAPON」展、日本国内3会場で「交差する魂」展（はた2008）、10年パリで「アール・ブリュット・ジャポネ」展、さらにオランダ等でも巡回展を開催し、大成功を収めた。川井田は、NO-MAを立ち上げた県社会福祉事業団企画部長の北岡賢剛らが、当時日本で障害者の作品が芸術的評価を得るのが難しかったことを鑑み、ヨーロッパのアール・ブリュットという枠組みで「お墨付き」と言えるような評価を得ようとしたと述べている。そして、北岡らの活動は出展契約における成年後見制度の利用や展覧会出展作品の収蔵といった面で課題を残したものの、作家の自己肯定感が高まったこと、福祉施設職員の意識が変わったこと、県でも障害者を「文化とともに創り上げていく仲間」とみなすようになったこと⁹など、さまざまな肯定的成果を生んだと評価している（川井田 2013: 47-59）。

日本では1993年に世田谷美術館が開催した展覧会「パラレル・ヴィジョン—20世紀美術とアウトサイダー・アート」を契機に、国内でアウトサイダー・アートという分野への関心が芽生えていたが（服部 2003: 18-20、中谷 2009: 219-220）、NO-MAの上記活動は、当該分野の作品がアール・ブリュットという概念とセットで認知、注目されることを促したといえる。2010年には日本財団がアール・ブリュット支援事業を開始し、11年にはパリの「ジャポネ」凱旋展が国内2箇所で開催され話題を集めた（アール・ブリュット・ジャポネ展カタログ編集委員会 2011）。中央線沿線のまち中野（2011年）、立川（2015年）におけるアール・ブリュットのイベントは、このような流れの中で始まった。さらに東京オリンピック・パラリンピック招致が決定すると、アール・ブリュットは社会における多様性促進の一助として文化オリンピックの枠内でも振興されていく。東京都は15年、芸術文化評議会アール・ブリュット検討部会を開催した（東京芸術文化評議会アール・ブリュット検討部会 2017）。中央線沿線の吉祥寺を舞台とした武蔵野アール・ブリュットも、当時の市長がオリ・パラ開催に向けた事業として発案したものであった（井ノ口 2018: 60）。

NO-MAが媒介した「アール・ブリュット」熱の高まりは、当時の国内における障害者の社会参加や芸術活動の促進¹⁰、上述した文化庁の「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第3次）」策定（2011年）と重なっていた。このように、日本のアール・ブリュット振興は、社会における多様な人びとの共生、とりわけ障害のある人たちの社会包摂を志向する大きな流れの中に位置づけることができよう。しかし、アール・ブリュットという枠組みで共生や包摂を目指すことには、さまざまな難しさもつきまとう。ここでは先行研究に依拠して2つの問題点を提起しておきたい。

第一は、アート（芸術）としてのアール・ブリュットないしアウトサイダー・アートが根本的に内包する矛盾である。中谷和人は、古谷嘉章（2001）の議論を引用しつつ、アウトサイダー・アートが西洋の美術界に対するアンチテーゼとして出発したにもかかわらず、何がアウトサイダー・アートであるかを判断するのは依然として西洋を頂点とする美術界の「インサイダー」の側であるとし、「イン／アウト」という非対称関係を乗り越えることの難しさを指摘している（中谷 2009: 220-221）。

第二は、日本におけるアール・ブリュットと障害者アートの重なり合いが包摂に与える逆説的影響である。服部正は、「日本においてアール・ブリュットの名前で呼ばれている作品のほとんどが障がいのある人によって制作されている」ことから、「現代の日本でアール・ブリュットと呼ばれているものは、作品の質による選別であると同時に、『障がい者アート』という作者の資質に関わる選別を内包している」と結論づけている。そして、本来「障がい者と健常者の境界を解体することを目論んだアール・ブリュットという言葉も、『障がい者の芸術』に適應すること」が、『障がい者の芸術』という選別が有する障がい者の隔離という構造を隠蔽する」効果をもたらすと批判している（服部 2016: 67）。

多様な個性をもつ人びとの社会包摂を志向する文化政策の現場では、アール・ブリュット振興を志向した担い手が、アール・ブリュットとは異なる看板の下で（も）事業を行うようになるという現象が起きている。先述した日本財団は、「障害者と芸術文化」の枠内で行っていたアール・ブリュット支援事業を DIVERSITY IN THE ARTS というプロジェクトへ発展的に解消させた¹¹。多彩な展覧会などの企画と情報発信を通じて、「障害のある人たちが生み出すアートと、それらを取りまく多様な文化が行き交うプラットフォーム」¹²の形成をめざしている。東京都も、先述した検討部会の提言をふまえ、渋谷公園通りギャラリーを「アール・ブリュット等の振興拠点」として改装、整備する一方で（2020年2月開設予定。東京都生活文化局 2019）、2015年からアーツカウンシル東京を中心にアートプロジェクト TURN を始めた。TURN 誕生のきっかけは2014年から15年にかけて行われた日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展である（アーツカウンシル東京 2018）。同展は監修者の日比野克彦が考案した「ひとがはじめからもっている力／陸から海へ」というキーワードの下、「アール・ブリュット＝障害者アートというこれまでの画一的な概念を超えること」をねらいとしていた¹³。2020年現在、TURN は「障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクト」と自己定義している¹⁴。そして、障害者福祉施設やフリースクール、さまざまなコミュニティスペースがアーティストと交流したり、一緒に参加型企画を立てたりするプログラムを行っている。日本財団や東京都のこれら施策は、アール・ブリュットという概念をはなれ、アートにおける多様性（ダイバーシティ）を鍵概念に据えている。「イン／アウト」の境界を乗り越え、障害者を選別しない形で皆がさまざまな「違い」を理解し楽しむことのできる社会を模索するには、アール・ブリュットに代わる新しい枠組みが必要との見解からであろう。

さまざまな困難をはらむアール・ブリュットを冠として社会包摂や共生をめざすことは、一見不可能のようにも思える。しかし、デュビュッフエがこの概念をあみだした意図に立ち返るなら、アール・ブリュットは「共生社会のアート」となりうるという見解も存在する。服部 (2016) は、アール・ブリュットと障害者アートとの重なり合いが「障がい者の隔離という構造を隠蔽する」可能性を批判したうえで、障害のある人から芸術の創造者としてのマインド・セットを学ばなければならないとしたデュビュッフエの発言を「あえて字義通りに学ぶ謙虚さをもつ」ことが、精神のバリアフリー、真の意味で包摂的な社会にたどりつくヒントとなると述べている。アール・ブリュット概念は、「これまで被支援者と思われていた人が実は私たちの精神の支援者であるという点で、双方向的な支援によるインクルーシブな社会を提案するものではないだろうか」と服部は結論づけている (服部 2016: 68-71)。

今日、社会包摂の概念は、文化庁と九州大学のハンドブックが示すように「多様な人たちが違いを認め合う」という意味合いを持ち、ダイバーシティや共生といった考え方や親和性が高くなっている。しかしそれでも、マジョリティとマイノリティという力関係を伴う二分法から完全には逃れられていない。大阪市の釜ヶ崎を拠点とする NPO 法人「こえとことばとこころの部屋」代表で詩人の上田假奈代は、自身の活動が社会包摂という概念に「回収される」ことに違和感を表明しつつ¹⁵、固定的な「包摂する／される」の境界を越え、「表現する、表現されたものを受け取る、また返す」という相互的エンパワーメントないし循環的な相互作用を志しているという (中山 2019)。アール・ブリュット振興が「これまで被支援者と思われていた人が実は私たちの精神の支援者である」という気づきを社会の中で促すことができるなら、それは上田が実践する「循環」のように、一歩進んだ共生社会をつくる実践となりうるのではないだろうか。

3. 中央線沿線のまちなのアール・ブリュットイベント

2010年代、中野、立川、武蔵野 (吉祥寺) という中央線沿線の3つのまちで、相次いでアール・ブリュットの年次イベントが始まった (表1参照)。いずれも駅を中心とした市街、ないしは自治体といった「まち」を舞台に、アール・ブリュットの作品や作家を紹介する展覧会等をフェスティバル的な形で開催し、コミュニティでアート作品やパフォーマンスを楽しみながら多様な人びとの交流や共生につなげようというものである。いずれも実行委員会形式をとっているが、企画運営のあり方はそれぞれ個性的で、それぞれプロフェッショナル型、草の根型、行政・市民協働型と特徴づけられる。本節では、各イベントの概要を整理し、3つのまちがそれぞれの観点からアール・ブリュットを通じて共生のまちを模索している状況を明らかにしていく。

表 1 3つのまちのアール・ブリュットイベント

	中野 (プロフェッショナル型)	立川 (草の根型)	武蔵野 (行政・市民協働型)
名 称	NAKANO街中まるごと美術館!	アール・ブリュット立川	武蔵野アール・ブリュット
開 始 年	2011	2015	2017
会 期	冬(2月頃) 約1か月間	秋(10月頃) 約1週間	夏(7月頃) 4日間 (2020年度は10日間を予定)
主 要 会 場	商店街等	伊勢丹立川店、モノレール駅、 市サービスセンター等	武蔵野市立吉祥寺美術館等
主 催	実行委員会 (社会福祉法人愛成会、商店会 等で構成。愛成会法人企画事 業部が中心的役割)	実行委員会 (個人で構成)	実行委員会 (福祉関係者、アート関係者、 教育関係者、学生等で構成。 武蔵野文化事業団が支援)
財 源	協賛金、補助金	協賛金	補助金(武蔵野市)
自 治 体 の 関 与	ほとんどなし (2019年は中野区が後援)	弱い (立川市および立川市社会福祉 協議会が共催、教育委員会等 が後援)	強い (武蔵野市長の発案で始まり、 市の予算で実施。市立美術館 が事務局機能を担う)
趣 旨 ・ 目 的	(2017年度) 人と人との出会い、他者への 理解、共生社会の実現 (2018年度) 東京都中野区で地域商店街と 社会福祉法人愛成会が協力し 開催するアートイベント。中 野を象徴する商店街一帯を美 術館に見立てる	(2018年度) ①アール・ブリュットの魅力 を広める ②従来とは違う角度からの文 化・芸術の推進 ③障害のある人たちの生きる 希望・社会参加 ④障害のある人もない人もと もに生きる社会の実現	(2017年度) ①アール・ブリュットに取り 組む人びとの発信の機会 ②「アートを通じた協働」の継続 ③アートを通して障害のある 方などへの理解を深め、多 様性を大切にするまちづく り (2019年度) 市民協働によって作り上げる アート展。アートを通じた多 様性を大切にする地域づくり を進める
出 展 作 品	国内外で高い評価を得ている アール・ブリュットの作品	多摩地域に住む作家の作品	武蔵野市にゆかりのある作家の 作品
出 展 形 式	企画展	企画展 (実行委員会が出展作家・作品を 選定)	2017、2020：公募展 2018、2019：企画展
アール・ブ リュットの 定義	「生(き)の芸術」と表される、 専門的な美術教育を受けてい ない人々の独自の発想や方法 により生みだされた芸術性に 富んだ作品(デュビュッフェ の引用)	正規の美術教育を受けていな い人が、作者独自の方法と発 想により制作された、既存の 芸術モードに影響を受けてい ない芸術作品のことで、その 多くは障がいのある人たちの 作品である	「生(き)の芸術」と表され、 既成の表現法にとらわれずに 独自の方法と発想で制作され た美術作品

(アール・ブリュット立川実行委員会 2019、井ノ口 2018、社会福祉法人愛成会 2017、「NAKANO 街中まるごと美術館! 2019」パンフレット、松壽 2017、武蔵野市ウェブサイト「武蔵野アール・ブリュット」をもとに筆者作成)

(1) NAKANO 街中まるごと美術館！アール・ブリュット一人の無限の創造力を探究するー（以下、NAKANO 街中まるごと美術館！）

NAKANO 街中まるごと美術館！は、社会福祉法人愛成会（以下、愛成会）の牽引によって2011年に始まり、毎年冬に開催されている。「障害の有無にかかわらず誰もが暮らしやすい地域社会の形成」（社会福祉法人愛成会2017: 4）という趣旨の下、ブロードウェイ、サンモールの二大商店街をはじめとする地域のさまざまなアクターが連携し、中野の街中での展示を中心に多彩なイベントを行っている。

メイン企画は、中野を象徴する商店街一帯を美術館に見立て、国内外で高い評価を得ているアール・ブリュット作品を紹介する展示である。近年ではブロードウェイの階段にポスターや作品を展示する「階段ギャラリー」、サンモールのアーケードに巨大バナーをつるす「空中ギャラリー」、中野南口商店街を飾る「看板ギャラリー」、駅前の金融機関でのロビー展示の4本が定番企画になっている。このほか、まちの他の会場（中野サンプラザ、商店街、ギャラリーなど）や外部の美術館での展覧会、映画上映会、パフォーミングアーツの催しなどが同時開催される。会期は約1か月間で、他の2つのまち（立川約1週間、武蔵野4日間）よりも長く、地元や外部から多くの人たちが来場し、アール・ブリュットにふれることができる。

イベントを支える愛成会はアール・ブリュットの普及振興で全国的にも有名な団体である。1958年の設立以来、知的障害者のための施設運営を中心的事業としてきたが、21世紀に入ってからには地域で暮らす障害のある人たちの創作活動の場「アトリエぱんげあ」運営など、障害者アートへの取り組みに力を入れている¹⁶。同会の副理事長でアート・ディレクターを務める小林瑞恵氏は、滋賀のボーダレス・アートミュージアム NO-MA がスイスとの連携事業を行っていた時期に NO-MA に勤務した経験を持ち、国内外でアール・ブリュット関連の展覧会を数多く手がけてきた。愛成会は2010年から法人としてアール・ブリュットの発信に組み込み、2012～13年のヨーロッパ巡回展「Art Brut from Japan (Outsider Art from Japan)」や14年の日本・スイス交流150周年記念事業「ART BRUT JAPAN SCHWEIZ」展の日本事務局となったほか、2018年に東京都とパリ市の文化交流事業「パリ東京タンデム2018」で「アール・ブリュット・ジャポネⅡ」展を開催した。2010年代半ばからは、厚生労働省と東京都の支援を受け、障害のある人の創作活動を美術・身体表現・音楽など広範囲で支援する「東京アール・ブリュットサポートセンター Rights」を運営している¹⁷。

小林氏を中心に愛成会が全面的にバックアップする NAKANO 街中まるごと美術館！は、まさにプロフェッショナルなプロジェクトと形容できる。展示作品はアール・ブリュットとしての質の高さを基準に選ばれ、海外から見学者も訪れている。その一方で、イベントの企画運営においては、地元・中野の商店会を中心に地域の人びとが実行委員会に関与し、まちのイベントとして着実に根づいている。運営は協賛団体の支援や東京都等からの補助金で賄われ、地元自治体である中野区はほぼ関与していないという。

中野では、アール・ブリュットの内容を、日本財団や東京都のいう「アートにおける多様性」に

近いものにとらえているようである。2017年開催のNAKANO街中まるごと美術館！は内閣官房オリンピック・パラリンピック推進本部事務局の委託による「障害者の優れた芸術作品による文化創造プロジェクト」の枠内で実施されたが、その報告書ではデュビュッフェの「生（き）の芸術」という定義を採用し、「障害のある方や幻視家、市井の人など、さまざまな作家が存在する」旨を明示している（社会福祉法人愛成会 2017: 4）。社会福祉法人が商店街と連携して行うプロジェクトではあるが、実行委員会には地元の国際交流協会の事務局長や東京レインボープライドの代表を加えている（同：8-9）。アール・ブリュットと障害者アートとの同一視を避け、障害の有無だけでなくさまざまな次元の個性を、「多様性の街」中野においてコンテンツと運営の両面でもりたて、人々の交流をはかろうとする意識がかいま見える。

実行委員長の青木武・中野ブロードウェイ商店街振興組合理事長は、社会福祉法人グローの齋藤誠一・企画事業部次長と行った対談の中で、チャールズ・ランドリーの創造都市論に依拠しながら「愛成会は中野の資源である」と述べ、社会福祉法人と商店街がコラボレーションすることがまちの活性化に役立つことを強調している。漫画文化を象徴するような店舗があり海外からの来客も多いブロードウェイは、文化に寛容で、多様性を受け入れる土壌をもっており、そういう自分たちがアール・ブリュットを振興し続けることが、ひるがえって自らのアイデンティティを確立することになるという（青木・齋藤 2017: 74）。

NAKANO街中まるごと美術館！は、まちを訪れる人たちが日常風景の中でアール・ブリュットの作品に接し、多様な生き方を実感することをねらっている。同時に、コミュニティの核である商店街の人たち自身も、毎年のイベント開催でさまざまな立場の人と交流し、作品にふれることを通じて、多様性の街としてのアイデンティティを更新している。2020年の10周年記念イベントでは、街中のギャラリーを増やし、視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップも開催する¹⁸。アール・ブリュットのプロジェクトを通じて、中野は、皆が違いを認め合う、より寛容なまちへと進化しているといえるだろう。

(2) アール・ブリュット立川

アール・ブリュット立川は、NAKANO街中まるごと美術館！の展示に心を動かされた臨床美術士の松崎ゆかり氏が仲間とともに実行委員会を結成し、2015年に第1回を開催した。以来、「こころが描くアート」をモットーに、毎年秋、地元のデパートや商店、鉄道会社の協力を得てイベントを開催している。多摩地域に在住する作家の作品展示を主軸としており、駅に隣接する伊勢丹立川店をメイン会場に、2016年度以降は多摩モノレールの駅、市の教育施設やサービスセンターなど街中にも会場を広げている。会期中にはライブパフォーマンスやワークショップも開催される。2019年10月に筆者が訪れた「アール・ブリュット立川2019」では、伊勢丹のテラスがポスターやバナーで飾られ、同店入口付近のガラス張り特設スペースでライブペインティングが行われており、見学者で賑わっていた。

実行委員長の松崎氏は、活動の趣旨のひとつとして、アール・ブリュット作品の中には「息のむほどの迫力があり、見る者の心を震わせ感動を与える」ものが少なくなく、「このような感動を一人でも多くの人に共有してもらいたいとの思い」があったと述べている。アール・ブリュットの作品の「多くは障がいのある人たちの作品」であり、感動の共有を通じて「障がいのある人へ偏見や固定観念を拭き去り、真の理解につなげていきたい」という。また、イベントを障害のある人たちが収入を得る機会とすることも重視しており、「障がいのある人たちが、より社会参加できるきっかけとし、彼らの目的と希望になればよい」とも述べている。「障がいのある人もない人もお互いを理解し、尊重し合い、明るく楽しく暮らせる共生社会の実現を目指している」という(松崎2017: 157)。

立川のイベントの企画運営は典型的な草の根型である。10名強の実行委員の中核は臨床美術士や障害をもつ人の親など、障害者福祉にかかわる個人であり、社会福祉協議会事務局長や市の職員がサポーターとして関与する。実行委員会は一年を通じ、展示作品の収集や作家の発掘、協賛の依頼、広報などに休まず活動している。予算の大半は地元の企業・団体・個人からの協賛金でまかなっており(2018年度で71.2%。アール・ブリュット立川実行委員会2019: 12)、チラシには40件以上の協賛団体の名称がA4サイズの長辺に沿ってぎっしり並ぶ。イベントは実行委員の精力的な活動によって支えられているが、その分委員の負担も大きく、メンバー自身も年齢を重ねる中、次世代への継承が課題となっている。

アール・ブリュット立川は、障害のある人と共生するまちづくりを大きなテーマとしている。イベントは展示が中心であるが、作家自身による作品紹介やライブパフォーマンスを行う、障害のある人に受付スタッフとして働いてもらうといった形で、来場者との交流をはかっており、アンケートでも好評を得ている(アール・ブリュット立川実行委員会2016)。受付スタッフに謝礼を支払うほか、当日配布パンフレットの準備を事業所に依頼するなど、収入の機会も提供している。立川は、北川フラムのディレクションにより190のパブリックアートを配したフェアレ立川を有する「アートのまち」であり、市の役所や社会福祉協議会、教育委員会等もアール・ブリュット立川に協力・後援している。

アール・ブリュット立川は、その成り立ちや趣旨から障害者アートの振興と重なるところが多いが、イベントで扱うアール・ブリュットの定義はデュビュッフェのそれに基づいている。展示に際しては、「せっかく会場に足を運んで下さるお客様に、障がい者アートという枠を超えた純粋な視点で芸術作品を楽しんでいただくため、作品の芸術性を何よりも心がけているという(松崎2017: 157)。来場者アンケートでは、障害のある当事者や家族、福祉関係者からと思われる回答を別にすると、「障害があるのにすごい」「障害のある人とは思えない」のような障害というカテゴリを前面にした記述は少ない。むしろ、「気持ちが沈むことが多かったのですごくパワーをもらえた気がします」、「心と技の両輪…に何かの力が働いているような気がします」、「パワーをもらいました。私も絵を描きたくなりました」「気の遠くなるような細かな作業の跡に圧倒されました」といっ

たように、作品そのものに力づけられた、純粋に圧倒されたという感想が目立つ（アール・ブリュット立川実行委員会 2016）。「建築関係の仕事をしているのでとても参考になった（デザインが）」、「自分も絵が好きで何を描こうかと悩んでる事が恥ずかしくなった」といった声もみられる（アール・ブリュット立川実行委員会 2018）。

アール・ブリュット立川の来場者アンケートからは、障害のある作家の作品に鑑賞者が「パワーをもらう」経験を通じて、「これまで被支援者と思われていた人が実は私たちの精神の支援者である」という気づきを促されていることがうかがえる。建築や絵画の制作活動に携わる来場者が、アール・ブリュットの作家から芸術家としてのマインド・セットを学んでいる様子も見てとれる。立川のイベントは、障害の有無をこえて純粋な視点で芸術作品を楽しむ催しであると同時に、服部のいう「双方向的な支援によるインクルーシヴな社会を提案する」機会になっているといえる。

(3) 武蔵野アール・ブリュット

武蔵野アール・ブリュットは、2017年に当時の邑上守正市長の発案で、市政70周年記念事業および市の文化オリンピック事業として立ち上げられた。プロジェクトはオリンピックイヤーである2020年までの4年間をめどに、毎年夏、吉祥寺の商業施設「コピス」内にある武蔵野市立吉祥寺美術館をメイン会場とした展覧会を中心的企画としている。2017年と2020年は公募展、中間の2018、19年は企画展で、2017年と18年にはメイン会場以外に市内のギャラリーでも展示が行われた。会期中にはパネルディスカッション、ギャラリートーク、映画上映、ワークショップなどの関連ミニ企画も実施される。展示は武蔵野市にゆかりのある作家の作品で構成している。

イベントの開催の背景には、これまで各種計画策定やコミュニティセンターなど市民参加でさまざまな事業をつくりあげてきた武蔵野市の歴史と、市内で多様な形でアートに取り組み発表する団体や集まりの存在をふまえ、オリ・パラに向けて「武蔵野市に関わる人たち」でつくりあげる企画を実現させたいという市長の強い願いがあった（井ノ口 2018: 60）。資金や事務局機能の面ではメイン会場の美術館を運営する市の指定管理者（武蔵野文化事業団）が支えている一方、企画や実行は市内の関係者で構成する実行委員会が専門的アドバイザーとともに担っており、行政・市民協働型の事業といえる。10名強の実行委員会の中心は市内の障害者福祉関係者（福祉施設やNPOの代表）とアート関係者（アトリエやギャラリーの主宰者）で、年度により市の職員や観光機構の代表、教育・保育の関係者などが加わっている。吉祥寺を地元とする成蹊大学は2018年度以降実行委員を出しており、2019年度からはボランティアサークルの学生代表もオブザーバーとして委員会に参加している。企画の内容面では、美術家で薬剤師でもある三友周太氏が2017年のスタート時以来監修者として関わっている。2019年度からは三友氏に東京藝術大学名誉教授の坂口寛敏氏、社会福祉士の酒井陽子氏（2017・18年度の実行委員長）を加えた3名がアドバイザーチームとなった。

中野や立川のイベントと比べた武蔵野アール・ブリュットの特徴は3つ挙げられるだろう。第一に、行政の関与が強いことである。市長の発案で始まったプロジェクトであり、予算は市が指定管

理者を通じて拠出し、事務局は市立美術館が担う。市役所内での所轄は、初年度の2017年は障害者福祉課、2018年度以降は市民活動推進課（文化政策担当部署）で、これらの部署からも代表が実行委員会に出席する。財源が安定し、協賛金の依頼や助成金の申請に奔走しないで済む反面、機動性や企画内容の柔軟性の面ではハンディがある。市の予算は2020年度までしか確定しておらず、本稿執筆時点でオリ・パラ後の事業継続のめどは立っていない。

第二に、実質2年に1度ではあるが、公募形式を採り入れていることである。2017年の募集内容は、デュビュッフェの定義をふまえたアール・ブリュットの説明「生（き）の芸術と表され、規成の表現法にとらわれずに独自の方法と発想で制作された美術作品」に加えて、「障害のあるなしに関わらず、表現したい気持ちを自由に発揮したワクワクする作品をお待ちしています」となっている（武蔵野アール・ブリュット実行委員会2017）。審査委員は上述の坂口氏を含む3名の美術専門家（絵画および造形分野）で、一次審査（写真審査）と二次審査（実物審査）の二段階で出展作品を選定する。

第三に、障害者福祉以外の分野も含む多様な立場の人たちが協働して実行に参画することである。実行委員の所属は、芸術活動を行う福祉施設、障害者が（も）通う芸術活動の教室、市内のギャラリー、学習支援や保育関係の団体、大学など多彩である。オブザーバーではあるが学生も会議に参加しており、実行委員会は世代の面でも幅広い。これらのメンバーが約半年から1年弱の間、ほぼ月1回のペースで集まってフラットな関係で意見を出し合い、コンセプトから広報資料作成、会期中の来場者案内、作品の搬入・搬出まで協力して企画をつくりあげる。中野の実行委員会も多様な立場の人々から構成されているが、開催回数は格段に少ない（2017年の場合、会期前に2回、会期後に1回であった。社会福祉法人愛成会2017: 10）。武蔵野では行政の力も強いが、企画内容や実行の実質面では実行委員の意見に基づく運営がなされている。実行委員会で顔を合わせ一緒に作業することで、異なる分野の関係者の間に新しい共同意識やつながりもできてきている¹⁹。

武蔵野アール・ブリュットは、障害のあるなしにかかわらず人間が持っている「表現したい気持ち」を企画の中心においている。実行委員会が設定する各年度のコンセプト（2017「ヒトが表現するということ」、2018「描かずには／創らずにはいられない」、2019「【こだわ・り】」、2020「ヒトが表現するということ、再び」）が、そうした姿勢を端的に表している。デュビュッフェのアール・ブリュット概念の中では「無傷であること」だけでなく「精神のほとばしり」に力点をおいた解釈といえる。

監修者の三友氏は、イベントの来場者が、そうした「表現したい気持ち」を、出展作品の鑑賞だけでなく自身での実践の中で感じられる企画も行ってきた。2017年にはワークショップ「HIMONINGEN（ヒモニンゲン）」、2019年には来場者参加型アート「100 colors have 100 stories」を実施している。いずれも会場で来場者が小さな作品を制作し、それを集めたりつなげたりしてインスタレーションをつくるというものである。来場者の中には障害をもつ人、高齢者、子ども、外国人などさまざまな人たちがいるが、三友氏の企画はそうした多様な個性を持つ人たちがともに表

現し、作品を通してつながりあうことを趣旨としている。筆者が実行委員として参加した武蔵野アール・ブリュット 2019 では、来場者参加型アートのコーナーで、子ども連れの家族が熱心に作品をつくったり、来場者と学生ボランティアとの間で会話が生まれたりする場面がみられた。最初は関心を示さなかった来場者も、展示室を鑑賞すると創作欲が湧き、工夫を凝らして制作に没頭する姿が印象的であった。参加型アートに関わった来場者が皆、服部が述べたような意味で「被支援者だと思っていた人たちが支援者だ」と意識したわけではないであろう。しかし、アール・ブリュットの作品が触媒となって、会場を訪れた多くの人たちが「精神のほとばしり」を感じ、創作行為を通じて作家、来場者、実行関係者の間にゆるやかなつながりが生まれたとはいえるだろう。

武蔵野アール・ブリュットは3つのイベントの中でもっとも歴史が浅い。今日の社会包摂型文化活動が目標とすべき「エンパワメントと意識変革」の実現手段としてみた場合、行政・市民協働の現状には改善の余地が多々ある。しかし、立場の異なる人たちが対話と協力を重ね、すべての〈ヒト〉がもつ表現への意欲を軸に据えたアール・ブリュット解釈を確立する中で、独自の共生社会への道筋が見えてきたことも確かである。2021年度以降のプロジェクトの展望はまだ白紙であるが、アール・ブリュットを通じた共生のまちへの模索がさらに続くことを願いたい。

以上概観したように、中央線沿線の3つのまちのプロジェクトは、実行委員会の構成や行政の関与の度合いなどの面で各々独自の色を帯びている。アール・ブリュット振興の方向性も、多様な個性の解放と理解の促進、障害のある人たちとの共生、人間がもつ「表現したい」気持ちを通じたつながり合いと、それぞれ個性的である。しかし、いずれのまちも、デュビュッフエの編みだしたアール・ブリュット概念から出発し、各々のかたちでマイノリティの社会参加、マジョリティの意識変革、双方向的な相互作用を促そうとしている。

4. おわりに

日本文化政策学会の研究大会で筆者が中央線沿線の3つのまちの事例を「共生社会のアート」というタイトルで報告した際、複数の方々から「アール・ブリュットと共生社会を結びつける」というアプローチの問題性を指摘するコメントをいただいた。本稿のテーマは、アール・ブリュット、障害者の創作活動、社会包摂、まちのアートプロジェクトといった多様かつ複雑な論点を含んでおり、いずれの論点についても筆者は勉強不十分である。前節で行った3つのまちの事例分析は表面的なレベルにとどまっており、来場者やとりわけ出展作家自身がプロジェクトを通じてどれだけエンパワーされたかの検証は今後の課題である。しかしそれでも、アール・ブリュット振興が真の意味でインクルーシブな共生社会の実現につながりうること、中央線沿線のアール・ブリュットイベントが、少なくともプロジェクトの担い手の側においては、そうした共生社会の構築への手段とし

て少しずつ発展していることは示しえたのではないかと思う。

アール・ブリュットのもつパワー——作り手の「創らずにはいられない」という意欲やこだわり、作品に表れるとりどりの個性、観る者を圧倒し心を動かす作用——を通じて、多様な人びとが生き生きと暮らせるまちを実現したいという願いは、3つのプロジェクトの担い手に共通している。アール・ブリュットに潜在する一種の「あやしさ」や反体制性をも許容し楽しむ姿勢は、アングラでカオスなものを受け入れ発展させてきた中央線文化に支えられているのかもしれない²⁰。

3つのまちは、プロジェクトの企画運営にまつわる課題も共有している。アール・ブリュットのとらえかたや活かしかた——障害者アートとの区別、作り手の側のエンパワメントと社会の意識変革、多様性のさまざまな次元をどう採り入れるかなど——は、企画の内容と実施の両面でさらに深く検討する必要がある。五輪終了後を展望したサステナビリティは、とりわけ立川と武蔵野で問題になっている。イベントを持続可能な形で継続していくために、今後は3つのまちが直接間接に連携することも大切になるだろう。中央線沿線の取り組みは始まったばかりだが、まち同士のつながりも深めつつ、息を長くしてプロジェクトを展開していくことが望まれる。

注

- ¹ 本稿の内容は、日本文化政策学会第13回研究大会で行った報告(2019年12月22日、於・さいたま市文化センター)を下敷きにした。貴重なコメントを下さった座長、副座長、フロアの皆様に心から御礼申し上げます。
- ² 熊倉純子らはアートプロジェクトを「現代美術を中心に、おもに1990年代以降日本各地で展開されている共創的芸術活動」であり、「作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入りこんで、個別の社会的象徴と関わりながら展開される」と定義し、その特徴として制作プロセスの重視、さまざまな属性の人びとのコラボレーションなどを挙げている(熊倉2014:9)。本稿で扱う事例のうち立川と武蔵野のイベントは作品の現物展示を主とするが、ライブ型や参加型の催しも同時に行われること、市民自らが事業の企画実行に携わること等を考慮し、広い意味でのアートプロジェクトと位置づける。
- ³ 社会(的)包摂は、英語のsocial inclusionの訳語である。日本の政策用語としては、厚生労働省系列では社会的包摂、文化庁系列では社会包摂という語が用いられる。一般用語として流通範囲が広いのは社会的包摂の方であるが、芸術文化の文脈では社会包摂という表現が定着している(中村2018)。
- ⁴ 障害者アートやアール・ブリュットに関する先行研究では、用語の表記に「障害」「障がい」の双方を用いている。中野と武蔵野のアール・ブリュットイベント関係者は「障害」、立川の関係者は主に「障がい」の表記を使用している。本稿では前者の用語法にならない、引用箇所を除いて本文での表記を「障害」に統一する。
- ⁵ 成蹊大学文学部スペシャルレクチャーズ「共生社会のアート:中央線沿線のまちとアール・ブリュット」(2019年7月27日、於・成蹊大学4号館ホール)。
- ⁶ シンポジウム報告者の小林瑞恵氏(中野)、松喜ゆかり氏(立川)、酒井陽子氏(武蔵野)、討論者の伊藤昌亮氏(成蹊大学文学部)、中野と立川の関係者の皆様、武蔵野アール・ブリュット2019・2020実行委員会関係者の皆様に深く感謝申し上げます。
- ⁷ 障害のある人の芸術・創作活動には、立場や分野を異にする人びとが多様な概念・用語を用いてアプローチしている。村谷つかさは、「アール・ブリュット」を含むさまざまな鍵概念で活動する人たちが論点を揃えて議論や実践を行う必要性を指摘し、プラットフォームとして活用できる「指標」の作成を試みている(村谷2019)。

- ⁸ 財団法人たんぽぽの家理事長の播磨靖夫は、障害者の表現活動を人間性を回復させる新しいアートにとらえ、1995年からエイブル・アートという独自の概念に基づき、「芸術の社会化・社会の芸術化」をはかる市民芸術運動を推進している。播磨靖夫「ムーブメントの背景」<<https://tanpoponoye.org/ableart/background/>>、2020年1月27日閲覧（以下、ウェブサイトの閲覧日はこれに同じ）。
- ⁹ 2011年に「美の滋賀」発信推進室を設置し、アール・ブリュットと近代美術、仏教美術を同列に活用するなど「障害者の力を借りて既存の美術を問い直して再編集していく試み」を続けている（川井田2013: 56）。
- ¹⁰ 中央での主要な施策だけでも、障害者雇用法改正と自立支援法施行（2006年）、厚生労働省と文部科学省による「障害者アート推進のための懇談会」共催（07～08年）、厚生労働省の「障害者の芸術活動支援を振興するための懇談会」開催（13年）と障害者の芸術活動普及支援事業の推進、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」施行（18年）と続いている。なおNO-MAを運営する社会福祉法人グローは、障害者の芸術活動普及支援事業の主要な担い手のひとつである。
- ¹¹ 日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS <https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/diversity_in_the_arts>
- ¹² DIVERSITY IN THE ARTS TODAY <<https://www.diversity-in-the-arts.jp>>
- ¹³ 日本財団ウェブサイト「日比野克彦監修 アールブリュット美術館4館による合同企画展」2014年7月18日更新 <<https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2014/20140718-22319.html>>
- ¹⁴ 公式ウェブサイト「TURN とは」<<https://turn-project.com/about>>
- ¹⁵ 上田は、文化庁から2015年に「アートによる社会包摂」の先端的事例として表彰された際の「おれいのことば」の中で、「わたしの活動が社会包摂だとされると、とても違和感があります。…励まされ喜ばせてもらっているのはわたしの方だからです」と述べている。上田假奈代ウェブサイト「上田假奈代あなたのうえにも同じ空が」<www.kanayo-net.com>に掲載。
- ¹⁶ 社会福祉法人愛成会ウェブサイト「法人概要」<<http://www.aisei.or.jp/gaiyou/>>、「あゆみ」<<http://www.aisei.or.jp/gaiyou/history/>>
- ¹⁷ 「東京アール・ブリュットサポートセンター Rights（ライツ）とは」<<https://rights-tokyo.com/aboutus>>
- ¹⁸ アール・ブリュット中野街中まるごと美術館！ウェブサイト<<https://nakano-artbrut.info>>
- ¹⁹ 武蔵野アール・ブリュットを支える行政と市民の協働は、武蔵野市政の諸分野における長年の歴史的経験に基づいている（成蹊大学文学部学会2006）。
- ²⁰ この論点は伊藤昌亮氏（成蹊大学文学部教授、武蔵野アール・ブリュット2017実行委員）から示唆を受けた。記して感謝申し上げる。

引用文献

- 青木武・齋藤誠一「対談 文化芸術が街にもたらす可能性～商店街がもつ今後の役割とその意味～」(社会福祉法人愛成会『障害者の優れた芸術作品による文化創造プロジェクト報告書:NAKANO街中まるごと美術館！アール・ブリュット～人の無限の創造力を探究する2017』2017年2月、72-75頁)。
- アーツカウンシル東京『TURN NOTE「TURNにふれたときの言葉」2017』、2018年3月。
- アール・ブリュット・ジャポネ展カタログ編集委員会『アール・ブリュット・ジャポネ』現代企画室、2011年。
- アール・ブリュット立川実行委員会『アール・ブリュット立川2016アンケート集計』日付なし（2016年頃）。
- アール・ブリュット立川実行委員会『アール・ブリュット立川2018アンケート』日付なし（2018年頃）。
- アール・ブリュット立川実行委員会『2018年事業報告と2019年事業計画案』、日付なし（2019年5月頃）。
- 井ノ口和子「『アール・ブリュット』作品の鑑賞行為』に関する考察—『武蔵野アール・ブリュット2017』来場者アンケートの分析と考察」(『共栄大学教育学部紀要』第2号、2018年、57-72頁)。
- 熊倉純子監修、菊地拓児・長津結一郎編『アートプロジェクト：芸術と共創する社会』水曜社、2014年。
- 川井田祥子『障害者の芸術表現—共生的なまちづくりに向けて』水曜社、2013年。

- 小林瑞恵「アール・ブリュットが問いかけるもの」(渡邊芳樹・小林瑞恵『スウェーデンのアール・ブリュット 発掘：日常と独学の創造価値』平凡社、2018年、第1章)。
- 社会福祉法人愛成会『障害者の優れた芸術作品による文化創造プロジェクト報告書：NAKANO 街中まるごと美術館！アール・ブリュット～人の無限の創造力を探究する2017』2017年2月。
- エミリー・シャンブノワ(西尾彰泰・四元朝子訳)『アール・ブリュット』文庫クセジュ、2019年。
- 成蹊大学文学部学会編『公助・共助・自助のちから—武蔵野市からの発信—』風間書房、2006年。
- 東京芸術文化評議会アール・ブリュット検討部会2017『アール・ブリュット検討部会報告書』2019年1月19日。
- 東京都生活文化局・公益財団法人東京都歴史文化財団「アール・ブリュット等の振興拠点『東京都渋谷公園通りギャラリー』来年2月8日(土曜日)にグランドオープン」(プレスリリース)、2019年11月8日。
- 中谷和人「『アール・ブリュット／アウトサイダー・アート』をこえて—現代日本における障害のある人の芸術活動から—」(『文化人類学』第74巻第2号、2009年9月、215-237頁)。
- 「NAKANO 街中まるごと美術館！アール・ブリュット—人の無限の創造力を探究する2019—」パンフレット。
- 中村美帆「文化政策とソーシャル・インクルージョン—社会的包摂あるいは社会包摂」(小林真理編『文化政策の現在2 拡張する文化政策』東京大学出版会、2018年、第6章)。
- 中山博晶「ホームレスの表現活動を通じた社会包摂の理念と実際—釜ヶ崎芸術大学を事例に—」日本文化政策学会第13回研究大会分科会報告レジュメ、2019年12月22日。
- はたよしこ編著『アウトサイダー・アートの世界—東と西のアール・ブリュット』紀伊國屋書店、2008年。
- 服部正『アウトサイダー・アート—現代美術が忘れた「芸術」』光文社新書、2003年。
- 服部正「日本の福祉施設と芸術活動の現在—アウトサイダー・アートと障害者アートのはざまで」(藤田治彦編『芸術と福祉：アーティストとしての人間』大阪大学出版会、2009年、241-262頁)。
- 服部正「膝が痛い芸術家—アール・ブリュットは支援概念になり得るのか」(『心の危機と臨床の知』第17巻、2016年2月、61-72頁)。
- 古谷嘉章『異種混濁の近代と人類学—ラテンアメリカのコンタクト・ゾーンから』人文書院、2001年。
- 文化庁×九州大学共同研究チーム『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』2019年。
- 松崎ゆかり「『アール・ブリュット立川』の活動～ところが描くアート～」(本郷寛監修『新時代の知的障害特別支援学校の図画工作・美術の指導』ジヤース教育新社、2017年、156-161頁)。
- 武蔵野アール・ブリュット実行委員会『武蔵野アール・ブリュット2017作品募集』2017年。
- 武蔵野アール・ブリュット実行委員会「武蔵野アール・ブリュット2019開催報告」2019年。
- 村谷つかさ「障がいのある人の創作活動を社会との関係で捉え直す—活動の論点整理と推進の仕掛け—」(『文化政策研究』第12号、2019年5月、47-67頁)。